

友人との手紙

みなみ くんぞう

南 薫造 1883-1950 画家

東京美術学校で武男と同期。卒業後、イギリス・フランスに留学。同校教授。文展に連続入選、帝展美術院会員。

<1907(M40).9.16> No.C2

寺崎武男（ヴェネチア）→ 南薫造（安芸）

「…私はこの頃、ローマに来た昔の日本の使節について描こうと、今多くの材料を得つつあります。又伊太利の歴史家、上流の人々、も賛同してくれて、多くのたすけを得ています。宗教画を描こうとするなら、当地に来るといい。当地に史料をさぐり、多くの趣味深き古跡を見よう。世界的の日本を画こうよ！…自分で新しい美術を生まんとするなら当地に来るといい…」

<年不明.9.2> No.C10

寺崎武男（ヴェネチア）→ 南薫造（ロンドン）

「親愛なる兄の来往を満身の喜びを以て祝します。遠き旅の後は十分静養して、其の後大なる元気を以て盛りあげてください。暗々なる日本の美術界に光を与えるものは君の外ではないと信じている。僕の君に対する理想を現実ならしめて下さい…」

南薫造や平井武雄は、寺崎武男と東京美術学校時代の同級生である。卒業後もそれぞれ留学し研鑽を重ねながら、画家同士として、良き友人として、生涯にわたり親しく交流が続いたことが読み取れる。特に、平井のハガキは最も数多く残っており、頻繁に文通していたことがわかる。



ひらい たけお

平井 武雄 1882-1943 画家

東京美術学校洋画科で武男と同期。卒業後渡米し、ニューヨークで洋画修業。帰国後、日本水彩画会創立。関東大震災の罹災会員救済のため、支那・仏印・ビルマ・印度で展覧会開催。女子美術専門学校講師。

<1908(M41).8.?> No.6

平井武雄（ニューヨーク）→ 寺崎武男（ヴェネチア）

「…遊ぶといえば早く君や南氏に遇いたいね。語りたいね。今では君は伊太利語は余程出来てよう。僕の英語はまだからだめよ。…」

<1909(M42).4.?> No.14

平井武雄（ニューヨーク）→ 寺崎武男（ヴェネチア）

「…僕等画かきという職業は一手何時出来上るといいう切りのない仕事だが人類の自然を欠いてまでも自身をギセイにする程のことはないと思う。しかし何処の国へ行っても自由に安全に食べ得、金を取る事の出来るという職ではないのだから或人の如き青年中に急いで結婚するのは僕はせん考だ。…」

<1916(T5).10.28> No.30

平井武雄（伊香保）→ 寺崎武男（ヴェネチア）

「宮□から永田君の出てきた。写生として湯に□□今二人は将棋をやっている。」

「遠くベニースの君を思って居るよ僕の船の装飾画は七分通り出来たよ」



武男宛ハガキ裏面の平井スケッチ 伊香保にて南薫造と永田二郎（美校同級生）の将棋の様子